

「第四の獣」

ダニエル 7 : 1 - 28

June.7.2020

ダニエル 7 : 1 - 28 (パワポ)

Preface

先々週の続きになりますので、まず復習したいと思います。

ダニエルは、神様から四頭の獣の幻を見せられましたが、この四頭の獣は、世の帝国や世の国々、また人々の価値観や生き様や歴史や文明などを表していることを見てきました。

そして、人の手によって作り出された世の帝国や価値観は、神の目から見れば獰猛な獣のような存在であることを表わしているものでした。

自分よりも弱い存在や国々を、躊躇なく、力でねじ伏せ踏みつぶしてしまう弱肉強食のジャングルのようなところが、人が作り出した世界だということです。

また世の中を表す大海から、海にそぐわない獅子や鷲や熊や豹などの陸や空の獣が出て来ていることは、

本来あるべき神の造られし秩序を乱すものこそ、世の帝国であり、国々であり、私たち人間であり、人間模様であり、人の作りだす価値観や文明であるということを表わしていました。

また、この四頭の生き物をよりよく理解するためには、ダニエル書 2 章のネブカドネツアル王が夢で見た人の形をした巨大な像と照らし合わせてみる必要があります。

Part One

ダニエル 2 : 31 - 33 (パワポ)

この巨大な人型の像は、人を高め、人を誇りとし、人を崇拜し、人を崇拜させ、人のためだと言って、人によって立てられ、まことの神を排除した、人本主義に立脚した、人間が一番というこの世の国々や世の中を表しています。

この像の大きな特徴は、全体的に放つ異常なほどの輝きと恐ろしい姿であり、異常なほどの輝きで人々に憧れを抱かせ、また人々に恐怖を覚えさせるほどの威圧感で、それに屈してしまわんばかりの力を誇示していました。

なのに、よく見てみると、頭から足にかけて、どんどん材質が悪くなっていきます。

金から銀、銀から銅、銅から鉄、鉄から粘土という風に、その異常なほどの輝きと恐ろしさが、見てくれだけの張りぼてで、全くもって足元が不安定な代物であることが分かります。

でも、人々は、違和感を感じるんだけれども、目に映るその輝きと威圧感のために、その本性を見極めることが出来ずに、丸め込まれていきます。

それぞれ、
頭の純金部分が、鷲の翼をつけた獅子で、73年続いたバビロン帝国を表し、
胸の銀部分が、口に3本の肋骨をくわえている熊で、200年続いたペルシア帝国を表し、

腹の銅部分が、四つの翼と四つの頭を持つ豹で、270年続いたギリシア帝国を表し、

最後、足の鉄と粘土部分が、現存するどの動物にもなぞられることの出来ない、「恐ろしくて、不気味で、非常に強かった」獣で、500年続いたローマ帝国と、それ以後今に至るまでの1500年間の人間世界を表すものです。

時間が経てば経つほど、歴史を重ねれば重ねるほど、帝国の君臨する期間は長くなり、より強固になっているように見え、科学技術も発達し、社会制度も整備され、以前よりも文明が進み、日増しによくなっていると私たち人間は考えますが、

この像の姿は、実のところ、人間の本質や根幹のところは、悪化し、衰え、痛み、アップグレードするどころか、ダウングレードしていることを、的確に指摘していました。

人の作り上げた技術文明は、ブーメランのように人類や天然の秩序を破壊する道具のようでもあり、人と人との関係まで悪化させている張本人のようにまでなっているということを教えてください。

人型の像の足の鉄と粘土に例えられているローマ帝国の栄華は、それまでの文明を淘汰しつつ、また吸収して発展させただけでなく、現代の政治、経済、教育、建築、文化、芸術、スポーツにいたるまで、その影響を及ぼすほどの膨大莫大なものですが、

神の目から見れば、所詮、金でもなく、銀でもなく、銅でもなく、鉄であり、粘土でしかないということです。

しかも、そのローマ帝国文明に端を発する21世紀最先端の文明社会に生きる私たちは、粘土のように不安定で、泥のように野暮ったい世界を生きているのに、

虚しさと漠然とした恐れをかき消すかのように、最先端技術に浮かれながら、最先端だ最先端だと、互いに言い聞かせている世界に生きていることを教えて

くれます。ここまでが、先々週までの復習です。

Part Two

ローマ帝国とそれ以後の世界の営みを表している、“恐ろしくて、不気味で、非常に強い” 第四の獣の特徴の途中のところで終わってしまいましたが、この第四の獣は、先の三つの獣と大きく違う特徴があります。

それは、現存するどの動物にもなぞられることの出来ない気味の悪い生き物であり、十本の角を持っていたことです。

ダニエル7：7 (パワポ)

この十本の角は、一義的には、時の権力を表しています。

また10という数字は、“満ちている、満たされている”ということを表わします。

つまり、ローマ帝国が、それまでのどの帝国よりも大きな権力を持っていたということを表わすわけですね。

またこれは、2章に出て来た巨大な人型の像の10本の足指に相当します。

さらには、この10本の角の権威は、ローマ帝国以後の権力や権威を表します。

ダニエル7：24 (パワポ)

十本の角は、この国から立つ十人の王。

とあります。

「この国から立つ」とは、ローマ帝国以後に立つ王たち、つまり、ローマ以後の帝国や国々、権力や勢力、力を持つ人間、文明や技術や分野など、現代に続くまでの覇権の推移を表しています。

つまり、ローマ帝国が滅びてから今日に至るまで、そしてこれから先、主イエス・キリストが再臨されるその日まで、現れては消え、現れては消えいく世界の覇権・主導権をひっくるめて“十本の角”というわけです。

その覇権や主導権は、人だったり、国だったり、文明だったり、技術だったり、思想や主義だったり、風俗風習だったり、価値観だったり、特定の分野だったり、と、色々な形で現れてきましたし、またこれからも現れるでしょう。

例えば、

現代の覇権国家はどこでしょうか？ アメリカ？中国？ロシア？英国？
支配している価値観はなんのでしょうか？ 科学至上主義？ 経済至上主義？
快楽享楽主義？ 進化主義？ 虚無主義・ニヒリズム？ それとも、終わりのな

き比較に価値を見出す相対主義？

主導権を握っている人は誰でしょう？ 民衆？為政者？大統領？軍指導者？
みんな、十本の角の要素を持っています。

それぞれみんな、大なり小なり、世界を壊し、人々の心を惑わしてきました。
でもそれらすべてが、悔い改めもなく、むしろやってきたこと、成してきたことを誇ってきました。

ローマ帝国は、今言った要素をすべて備えており、しかもローマ帝国以後に立つ覇権のすべては、ローマ帝国の遺伝子と伝統を多かれ少なかれ、みんな引き継いでいます。

前回、ローマ帝国の最大の特徴は、そのすさまじいほどの軍事力と言いましたが、その動力となる精神世界・思想は、ヘレニズム・古代ギリシャ文化にルーツを置きます。

現代社会をグローバリズムなんて言う言葉で表現しますが、結局のところ世界を席卷しているのは、アジアもアフリカも南米も関係なく、西洋文明です。

で、その西洋文明をなしている二大源流が、ヘレニズム・古代ギリシャ文化とヘブライズム・旧約聖書新約聖書を背景とするキリスト教文化なんですが、

現代の西洋文明に立脚したグローバリズム社会は、ヘブライズム・旧約聖書新約聖書を背景とするキリスト教文化に立脚した西洋文明ではなく、

まことの神を認めない人本主義思想のヘレニズム・古代ギリシャ文化を基盤とした西洋文明です。

要するに、現代社会を覆っている西洋文明を遡ると、ヘレニズム・古代ギリシャ文化を基盤にしたローマ帝国に行きつくんです。

そして、その根幹をなしている理念を平たく言いますと、まことの神をいないものとみなし、その神を信じる者を見下し、そして不滅の神の言葉を軽んずるということです。

Part Three

こんな世界観に立脚した世には、次から次と、新しいものが出てきます。

学校で習う歴史でも、人は・人類は、常に刷新しながら、常に発展させ、常に過去を凌駕するものを生み出しながらその歩みを進めてきたと教えますが、聖書は、それを真っ向から違うと教えます。

日の下に新しいものなど、何一つないと教えます。

有名な聖書箇所を見てみましょう。

伝道者の書 1 : 9 - 10 (パワポ)

日の下に新しいものは、何一つありません。
神を排除した世界に、新しいものは何一つありません。

神を認めず、神の存在を無視し、神の言葉をないがしろにしながら、見てくれだけを変え続けている世界に、新しいものは存在しません。
これが聖書の教える真実です。

しかし、たったひとつだけこの世に新しいものが存在します。

ヨハネの福音書 3 : 3 - 7 (パワポ)

第二コリント 5 : 17 (パワポ)

ガラテヤ 6 : 15 (パワポ)

第一ペテロの手紙 1 : 3, 23 - 25 (パワポ)

朽ちることのない神の言葉の約束通り、キリストのうちにあって、新しく生まれること、これだけが、この世で唯一、そして日の下で、また日の上においても、唯一新しいものです。

この真理をぼやかし、無いものとみなし、目をそらせ、
まがい物の新しいものを生産し続けて、人々や世界を牛耳る力の現われが、第四の獣であり、その十本の角です。

この十本の角は、戦略的に、自らが自らを否定し、さらに刷新して強力になったものが登場したかのように見せるために、
三本の角を抜け落ちさせながら、巨大な一本の角を生えさせます。

そして、偽りの刷新、まがい物の発展を見せつけ、「先のは古くて、新しいものが出たんだ！」と、ほら見ろと言わんばかりに、ものすごいアピール力と、まやかしの輝きと、威圧感で迫ってきて、有無を言わずそれを受け入れるように仕向けてきます。

そしてついには、その終わることのないメビウスの輪のような、偽りの刷新・新生という無限の繰り返し地獄に引き込み、人の心と世の中を牛耳ります。

ダニエル 7 : 7 - 8 (パワポ)

ダニエル 7 : 19 - 20 (パワポ)

先に生えた角を凌駕し、淘汰するように、新たにもう一本のぶっとい角が出て来てますが、

このぶっとい角には、人間の目のような目と、大言壮語する口がありました。

この目とは、認識する力を表します。

つまり、知性や理性を意味し、知性や理性を用いて、人の知性や理性に訴え、刺激し、結局人の知性や理性をコントロールし、掌握する力まで持っているということです。

実際、人は、知性や理性に訴えかけられたりすると弱いですね。それらしいことを、それらしく、堂々と論理立てて言われると、「そうなのかな？ いやそうだ！」と思わされてしまいますね。

獣は、心霊とかオカルトのような不可思議な力で牛耳ることもしますが、広く一般的には、知性や理性に訴えかけ、言葉をもって迫ってくるわけですね。

しかもその言葉は、大言壮語します。

きらびやかで、洗練されているように見せるために、言葉をもって宣べ伝え、宣伝し、啓蒙し、教育し、刷り込み、魅了し、言いくるめて行きます。

Part Four

この大言壮語する口が表すもう一つの意味は、神を装い、神のふりをするということです。

天地万物を創造された創造主なる神様は、“光、あれ。”という言葉をもって、天地万物を創造されました。

被造世界の創造は神の言葉によるものであり、神はその言葉によって世界を創造されました。

実際、言葉というものは、ものすごい力を秘めています。

人を殺すのには、銃も、刀もいりません。

言葉一つで、人を殺すことができます。

放った言葉一つで、肉体のみならず、精神まで殺すことができます。

逆に、言葉一つで、人を生かすこともできます。

だから、イエス様は、「兄弟に向かって、馬鹿者と言うことは、人殺しだ。」とおっしゃるわけです。

また、新しいものを作り出す時には、必ず、言葉から始まります。

言葉のない創造は、何一つ存在しません。

世の中に存在する、人の手によって作られたものでさえ、すべて言葉から始まります。

すべての創造は、言葉に依存しているわけですね。

なぜならば、天地万物が、神の言葉によって、造られたからです。

しかし、しかしですね、神の言葉によって世界が成り立っているということは、世も認めなければ、人も認めません。

そして、それを認めないように先導する獣がいるわけです。

獣は、神の言葉に依り頼まない言葉を発し、その言葉を駆使しながら、張りぼての創造を、次から次と成していき、神ではない獣のくせして、神のように創造できるんだと装い、アピールし、神だと人々に思わせます。

だから、この世の中、偽の、偽りの、見せかけだけの実の伴わない、愛のない神々だらけです。

あの人も神、この人も神、この物品も神、あの商品も神、この食べ物も、あの飲み物も神、あの岩、この石、あの川、この海、あの木、この草、あの学問、この分野、あの価値観、この説、あの思想、この思考、あの賞、この功績、あの学校、この会社、あの職業、この暮らし…

神に見せかけ、神に仕立て上げられた、偽りの神々だらけですね。

神の言葉にすぎらず、神の言葉を軽んじ、神の言葉なんかないものとみなす、大言壮語する口は、獣やその角が、神になりすましている輩（悪魔、サタン）であることを良く表しています。

全然きらびやかでも、洗練されてもいない不気味な獣なのに、大言壮語をもって、知性や理性に訴え、畳み掛けて、不気味な獣に魅力を抱かせ、角の虜にしていきます。

世の中、このように回っているということを、ダニエルはこの啓示をもって示され、今、私たちも示されています。

目で見て、手で触れて、耳で聴いて、舌で味わい、鼻で嗅ぐという、本来ならば、神が造られし祝福された五感が、罪ゆえに曇り、鈍り、

不気味な獣を素敵だと思ってしまうようになった私たち罪人・人類がいて、世の中があつて、それをコントロールして、人をさらに神から引き離そうとする輩が存在することを、教えてくれています。

Part Five

そして、この輩・獣が最も敵対視しているのが、まことの神を信じるクリスチャンたちであり、クリスチャンを聖徒とならしめたる三位一体の神様です。

ダニエル7：21（パワポ）

「聖徒たちに戦いを挑む」とは、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体の神様を信じ歩んでいる信仰者を迫害したということです。

そして、この信仰者を迫害し、世の人々を惑わす存在を、聖書では反キリストと言います。

マタイ 24 : 4-5、15、23-28 (パウロ)

第一ヨハネの手紙 2 : 16-18、4 : 3 (パウロ)

第二ヨハネの手紙 7節 (パウロ)

ヨハネの手紙の時代背景である西暦60～90年にあつて、まさに反キリストとして君臨したのは、ローマ帝国であり、ローマ皇帝ネロでありました。

ネロは、教会とクリスチャンたちを徹底的に迫害し、殺害しまくりました。

獣が、権力という偽りの正義を装い、人を、キリスト者を排除していったわけです。

さらには、反キリストは、ネロというような特定の人物だけでなく、ヘレニズム・古代ギリシャ文化に片足突っ込んだ聖書観だったり、信仰観だったりもしました。

ヘレニズム文化に染まった聖書観や信仰観は、教会に混乱や困惑を来たし、多くの者が信仰から離れて行ったようです。

現代でも、聖書を神の言葉としない教会だったり、牧師だったり、聖書の言葉を信じないクリスチャンが少なからずいます。 矛盾していますが・・・

だから、ここに、私たちキリスト者たちの忍耐と信仰が必要なんです。

来週もう少し詳しく見て行きたいと思っておりますが、ヨハネの黙示録13章には、ダニエル書7章に登場する獣とそっくりの獣が出てくるんですが、

その獣に戦いを挑まれた聖徒たち、キリスト者たちに語り掛けられた言葉があるので、見てみましょう。

ヨハネの黙示録 13 : 7-10 (パウロ)

ダニエルの時代のみならず、いやもっと拍車をかけて、もっと緊迫した時代が、今の時代です。

クリスチャンが、獣に戦いを挑まれて、敗北する時代が今の時代です。

屠られた子羊であられるイエス・キリストによって贖われていない者たちが、獣を拝み、捕らわれの身になっていく時代が今の時代であります。

だからこそ、私たちキリスト者の忍耐と信仰と、
靈的洞察力と靈的实践力と断ち切る力とやり抜く力と、
神の言葉に、主イエス様にすがっていく必要があるのです。

Part Six

3ヶ月近く、コロナ禍で家にいた子供たちと一緒に、草がぼうぼうになって荒れ放題になっていた家庭菜園を綺麗にしました。

まずは、土をシャベルで掘りながら、ぼうぼうの草を根っこから引っこ抜く作業をしました。

で、それが終わると、私たち家族が今の家に住み始めてから一度も、家庭菜園の土を変えたことがなかったので、ホームセンターに行って土を買って、土を入れ替えました。

そして、野菜の種を植え、苗を植え、水を撒き、ポールを立てて、やっと家庭菜園っぽくなって、今は、家族で毎日、日々成長する姿を見て、みんなで喜んでいるのですが、種が芽を出し、苗が成長していく姿がかわいくて仕方がないんです。

また、植物にも脳があるんじゃないかと思うぐらいに、によろによろとしたつるで、ポールに自ら巻き付いて行く姿が、不思議で仕方がありません。

そして、この小さな農作業を通して、今更ながら、改めて思うことがありました。

それは、なんだかんだ言っても、小さな種を蒔き、それを大地が受け止めて、芽を出させ、水と太陽光で成長し、やがて花を咲かせ、実りを実らせるという、神が創造された天然の秩序を、この命を営む英知を超えるものは、この世に何ひとつ存在しないし、これを超える創造は、今の今まで一度も登場したことがないということです。

そして、やっぱり人間は、神の手によって土のちりから造られたことは事実だということも、事新たに実感しました。

ほんのちょっと土いじりをするだけで、なんで、あんなにも清々しく、気持ちよくて、心も体もすっきりするんだろうと思うぐらい、楽しいんです。

水を得た魚のように、元気になるのを感じたんです。

私たちは、第四次産業革命なんて言うかっこいい名称を付けて、現代の最先端性を表現するような時代に生きています。

世界を席卷する大企業の多くが、実店舗を持っていません。

Google、Amazon、Facebook、Uber、Netflix、画面上という2次元の仮想世界が、形ある3次元の現実世界よりも、はるかに活

発に動いて、膨大な利益を上げる世界に生きています。

もちろん、こんなことが出来るようになるまで、色々なものが発展して、進歩してきたのでしょう。

そして、その進歩ゆえの文明の利器に助けられた場面もたくさんあったでしょう。

でも、それさえも神の恵みであって、決して、人間の英知が神よりも優れているということではないですね。

どこまでいっても、米粒よりも小さな種を蒔いて、その種を大地が受け止め、何十年、何百年かけて育つ大木に勝る創造は出て来たためしがありませんし、その神の創造の英知に依然せずに、命を育むことは出来ません。

光と水と空気と土が循環しながら、命を育む、この循環システムを超える英知は今の世界に存在もしなければ、人間の手で作り出すことも出来ないですね。

神の創造のわざを超えようと、手を変え品を変え、世がどんなにあがいたところで、光と水と空気と土の循環から、抜け出すことは出来ません。

こんな大切なことさえも、忘れさせようとする人間の作り出した文明社会。そして、獣の惑わしと誘惑。

Conclusion

こんな大事なことを教えてくれる、聖書こそ最先端です。

神の言葉こそ、神の啓示こそ、またそれを記録している聖書こそ、永遠の最先端です。

クリスチャンがこれを忘れたら、まさに終わりですね。

みなさんは、こんなことは考えたことありますか？

なぜ、神様は、現代のようなデジタル社会に預言者を立てて、聖書の言葉をワードで書き残させようとしなかったのだろうか？

なぜ、イエス様は、21世のデジタル世界ではなく、紀元元年のアナログ世界にいらっしやったのだろうか？

答えは簡単です。 デジタルよりも、アナログが優れているからです。

私たちは、このことに惑わされますが、神様は、当然のように惑わされません。神との交わりは、神の言葉を食することは、神に祈ることは、そして人を愛することは、デジタルではなく、アナログです。

土いじりのように、時間をかけて、頭をひねって、手足を使い、汗水流しながら

ら、悩みながら、葛藤しながら、七転八倒しながら、イエス様と歩いていくんです。

ボタン一つで、何でもやっているうちに、この大事なことを忘れないようにしたいものです。

祈りましょう。

祝祷：黙示録 13：9， 10

耳のある者は聞きなさい。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。